

ポストコロナの 可能性としての

〈女子たち〉

足下のユートピア

檜木祐人「ハクメイとミコチ」(三)

池上貴子

ポストコロナの可能性としての〈男たち〉

何を夢見、何を期待して、作家たちは〈女子たち〉を描いてきたのか、という疑問から始まったこのシリーズも、そろそろ終盤に入った。しかし総括に入る前に、一度考えておかねばならないのは、ジェンダー問題についての視線が〈女子たち〉に持っていかがちな〈男たち〉のことである。このジェンダーとしての〈男たち〉を置きざりにすることは、ポスト・コロナを生きていく〈女子たち〉にとっても得策ではない。女性たちが軽やかに〈女子たち〉と嘯くのに対し、冗談にも自らを〈男子〉とは呼びにくいところに、〈男たち〉の根深い何かがある。その〈何か〉は、

次のような数字に表れているように思う。

二〇二二年三月十五日に、厚生労働省自殺対策推進室と警察庁生活安全局生活安全企画課が共同で発表した統計「令和3年中における自殺の状況」では、二〇二一年度の自殺者は男性一万三九三九名、女性は七〇六八名で、男女で約二倍もの開きがでた。自殺は複数の要素が絡むとの報告もあるので一概に言えないが、それでもこの数値は、経営者であり、家長であり、〈男〉であるという、男性の生きにくさ、逃げにくさを端的に示している。男性の方が二倍自殺しやすい社会は、ジェンダーの観点からもっと問われるべきだろう。

男性の生きにくさという点で思い出すのは、今から二十年前ほど前、斎藤美奈子が『男性誌探訪』(二〇〇三年十二月、朝日新聞社)において、当時流通していた男性向け雑誌三十一誌を分析したことがあった。本作はいわゆる〈男性視線〉なるものを炙りだし、一風変わったジェンダー論を展開したユニークな評論である。もちろん、雑誌ごとに特色はあるのだが、総じて、男性社会(ホモソーシャル)という名の権力構造や、「良きパパ」として家族と豊かに過ごさねばならないという家父長制に基づいた保守性、そしてその反動としてのアウトローな言説(しかし反動なので本質は保守性のうちにある)が、随所にみられた。

斎藤はこれら男性誌に用いられた言説の傾向が、外部視線・対他的視線に囚われた自意識の強いものであると見てゐる。すなわち、「今般の女性誌に意味もなく氣どった雑誌は意外に少ない」のに対し、男性誌は「『ええかつこしい』を至上命令としているような雑誌がザクザク見つかる」と言う。その一例として、雑誌「BRUTUS」（マガジンハウス）については、「『ブルータス』を支配する気分を簡単にいえば『人とちがつてなくちゃイヤ』であろう。（中略）よくいえばマニアック、悪くいえば唯我独尊」と評し、奇抜さで差別化を図り、それを「オリジナリティ」と言い替える悪手を見抜いたのであった。

「こういうのを『進化の袋小路』というのかもしれない」と当時の斎藤は、〈オリジナリティの呪い〉にかかった男性誌の行き詰まりを表現したが、実はこの書籍の出版された二〇〇三年こそが、先述の自殺統計資料で統計を出してから四十四年間のうちに最も多く男性が自死した年であった。実に二万四九六三名。ちなみに女性は九四六四名である。バブル崩壊後、経営の破綻した会社を持つ中高年男性が多く自殺を選択したことが突出した数字の理由だが、先ほどの男性誌の傾向をみても、企業や家族といった対他的な責任への重圧が男性社会全体にのしかかって、助けを求める選択肢も与えられず、〈袋小路〉化していたことが理解できる。

さて、あれから二十年後、女性を取り巻く環境は曲がりなりにも大きく変わってきたが、ポスト・コロナを共に生きていく男性もまた「進化の袋小路」を突破できるのだろうか。そのヒントとして、『ハクメイとミコチ』論の三回目は、男性キャラクターに焦点をあて、彼らが無意識に達成しているポスト・コロナに有効な〈共生〉・〈共存〉というライフスタイルやメンタルについて、考えてみたい。

権力から距離を置き、必然的に生じる他者との違いを受け入れることで可能になる〈共生〉・〈共存〉の生活を、権力を抛り所としがちな〈男たち〉がどのように馴染ませていくのか。作者の榎木祐人は、「足下の」部分から、漫画ならではの表現を駆使して丹念に描いている。

よく謝るナライの謎

あくまで「足下のユートピア」なので、『ハクメイとミコチ』が暮らす社会でも上下関係はある。特に、主人公のハクメイが働く大工の世界では、「石貫會」^{いわぬきかい}の大工たちのトップに会長であり凄腕の大工「ナライ」がおり、ナライの弟子のイワシ、そしてイワシに師事したハクメイと、徒弟制度もとっている。極めて明確な〈タテ社会〉のヒエラルキーが形成されているのだが、興味深いことに、作品では、そのヒエラルキーの頂点に立つ渋く無口なナライが、